The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	山麓斜面地住宅地における風土的景観の特質とその保全に関する環境計画的研究
Author(s)	三宅, 正弘
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41455
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【 19 】

氏　　名	三宅正弘（みやけまさひろ）
博士の専攻分野の名称	博　士（工　学）
学位記番号	第　14189　号
学位授与年月日	平成10年10月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 工学研究科　環境工学専攻
学位論文名	**山麓斜面地住宅地における風土的景観の特質とその保全に関する環境計画的研究**
論文審査委員	（主査） 教授　鳴海　邦碩 （副査） 教授　笹田　剛史　　教授　水野　稔　　助教授　加藤　晃規

論文内容の要旨

本論文は，日本，とりわけ阪神間・六甲山麓部において近代以降に開発された山麓斜面地住宅地を対象に，風土的景観に着目して住宅地の計画論や街区形態および景観について分析し，その特質を明らかにすることを通じて，今後の斜面地住宅地開発や既開発住宅地の更新における計画・設計の指針に活かすべき知見を得ることを目指したもので，内容は6章からなっている。

第1章では，環境の風土性を認識する視点としての風土的景観に関する基本的な考え方および本研究の意義について述べるとともに，既往の研究の中での本研究の位置付けを行っている。

第2章では，明治末期以降，戦前までに行われた初期の斜面地住宅地開発における計画手法を明らかにするために，阪神間・六甲山麓部と，名古屋東部丘陵地の住宅地開発を事例として，計画内容や計画理念について論じている。

第3章では，前章でみた初期の開発から現在までの斜面地住宅地開発の計画上の特質を明らかにするために，阪神間・六甲山麓部の住宅地をとりあげ，斜面地における住宅地開発の展開と，その区画計画上の特徴を調査・分析している。

第4章では，これまでに形成されてきた住宅地の環境と景観の実態を明らかにするために，明治末期以降現在までの六甲山麓部における開発を5つの時期別に分け，それぞれの環境と景観の実態を調査・分析するとともに，その結果に基づき道路景観の類型化を行っている。さらに，これら斜面地住宅地の景観的特質が人々によって如何に認識されているかを明らかにする目的で，六甲山麓住宅地を描写した文学作品や地域案内書における景観記述を分析している。

第5章では，山麓斜面地住宅地において地場石材が景観に風土性をもたらしているという視点に立ち，これによって構成された石垣景観の実態を明らかにする目的で，六甲山麓部の芦屋市山麓市街地全域および初期に開発された神戸，芦屋，西宮，宝塚市内の7つの住宅地を対象として，地場石垣をもつ宅地の実態およびその変容傾向，さらに建設工事等によって新たに出土する地場石材の活用の実態を調査・分析している。

第6章では，これまでの考察をふまえて，山麓斜面地住宅地の開発や更新における風土的景観特性の持続の必要性

について論じ，新たな風土的景観を形成するための諸方策について論じている。

論文審査の結果の要旨

本論文は，風土的な条件が反映された景観を風土的景観と定義づけ，環境計画において地域性を反映するとともに，そのような環境の特徴を維持していく方法とその可能性に関して考察することを目的とし，日本，とりわけ阪神間・六甲山麓部において近代以降に開発された山麓斜面地住宅地を研究対象とし，まず初期の計画理念および住宅地プランを検討し，次いで時代的に異なる計画手法によって形成されてきた住宅地の環境的・形態的特質の実態を分析し，風土的な特性が反映された景観の実態とそれをもたらしている諸条件を明らかにすることを通じて，景観における風土性を維持していく方法を考察した知見をまとめたものである。得られた結果を要約すると以下の通りである。

(1)明治末期から昭和初期に六甲山麓部で行なわれた住宅地開発は，地形や既存樹木などの自然環境を尊重した開発であり，その道路計画も地形を生かした曲線道路主体であったことを明らかにしている。また同時代に行われた名古屋東部丘陵における山林住宅地開発は，曲線道路を採用すべきであるという計画論に基づいて計画されたことを検証している。さらに，戦後以降の山麓斜面地住宅地開発では，次第に大規模な土地造成が行われるようになり，その平面計画は基本的に格子状パターンに基づいていることを明示している。

(2)開発時期の異なる山麓斜面地住宅地の実態調査を通じて，宅盤と道路面とのレベル差に生じる擁壁・法面が景観に一貫して現れ，それが開発時期別に異なった環境的・形態的特質を示すことを明示し，さらに，これらの住宅地の環境を描写した戦前戦後の景観記述の分析を通じて，擁壁・法面に施された石垣が呈する景観が一貫して強く認識されている一方で，石材の地場性の認識に時代的な変化があるなど認識される景観の特徴が時代的に変化していることを明らかにしている。

(3)阪神間・六甲山麓部における芦屋市山麓市街地全域では全体の30％の宅地(戦前開発住宅地で39％，戦後開発住宅地で21％)が地場石材による石垣をもっており，初期に開発された神戸，芦屋，西宮，宝塚市内の７つの住宅地では22％から66％の宅地で地場石垣が現在も存在していることを明らかにしている。さらに，これらの地場石垣が宅地の細分化や更新を契機として減少している実態や，地場石材の流通が途絶えている現状を示している。

(4)風土的景観特性は風土的素材を新たな状況に適合させながら利用し続けることによって持続することを論じ，新たに出土する石材や廃棄されようとする石材を保存活用するシステムや現代的なデザイン手法の創出を含む，今日の住宅環境に適合した地場石材の活用手法の開発によって，山麓斜面地住宅地において風土的な景観を維持・継承していく方法について提言している。

以上のように，本論文は，阪神間・六甲山麓部の斜面地住宅地を主たる対象とした環境的・形態的特質の分析を通じて環境の風土性を認識する視点を提示するとともに，特に地場石材が風土的景観特性をもたらしていることに着目し，環境計画において地域性を反映しさらにそのような環境の特徴を維持していくことを可能とする方策の提案を行なっており，環境工学の発展に寄与する所大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。